

Title	洛星高等学校高校2年生における哲学講座の開講について
Author(s)	藤原, 義久
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6800
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

洛星高等学校高校2年生における 哲学講座の開講について

洛星高等学校 社会科教諭・教育部長
藤原 義久

本校で2004年度、2005年度の2年にわたって、上記の講座を開講させていただいた経緯について、ご報告させていただきます。

まず始めに、本校の簡単な説明をさせていただきますと、京都市の北西に昭和27年にヴィアツール会というカトリックの教育修道会が設立した、男子6年制の中高一貫校であります。現在、1クラス45人の5クラス体制で各学年とも約220名前後の生徒が在籍しています。進路は、全員が大学進学を希望し、ほぼ全員がセンター試験を受験します。従来から本校では、学習面だけでなくクラブ活動など放課後の自主活動も重視してきましたが、近年の学校5日制の潮流の中で、土曜日の授業のあり方を検討した結果、2003年度から「学校5日授業6日制」という形を取る事になりました。カリキュラム表上の授業は月曜から金曜に実施し、土曜日については、学年に応じた多様な取り組みを行っており、私自身、教育部長として各学年での実施内容の企画立案のサポート、集約、調整に当たっています。高校2年生では、時期によっては研修旅行や文化祭の準備に土曜日を

利用したり、実力テストを実施したりすることはありますが、普段の土曜日は通常授業と異なる70分の講座制授業を1日2コマ実施しています。各時間は、原則として生徒の希望で講座を選択でき、クラス担任を中心に7～8名の教師が講座を担当しますが、その内容は、授業の延長での問題演習や授業とは別のテーマ学習など、担当者によって様々です。その中で、通常の授業では扱えない、生徒の知的好奇心を刺激できる、大学での学問に結びつくような講座が幾つかでも開講できないものかという希望は、この土曜日をスタートした当初からの考え方の中にあつたものと思います。

一方、社会科（高校地歴科、公民科を、本校では中学との6年一貫校であることから社会科として扱っています。）としては、数年前から主に高校の倫理の非常勤講師として、大阪大学臨床哲学研究室の栗栖大司先生に授業をお願いしてきました。高校1年生の全員必修の授業から、高校3年生の受験生の指導まで、非常に熱心に指導して頂いており、生徒の評判も非常に高く、教科として心から感謝しているところです。そんな中で2003年度の終わり頃、栗栖先生から、所属されている研究室で高校現場での哲学の授業実践をされているが、本校でそうした取り組みができないだろうかとの打診を頂きました。前述のように大学との連携を模索していた教育部としては、近年、生徒の視野や教養

の幅が狭くなる傾向が強い中で、一つのテーマを議論しあいながら思索を深めていくという経験が、将来の進路を問わず（実際には理系、特に医学部志望者が多いのですが）重要ではないかとの思いから、是非この企画を実現できればと考えました。また、栗栖先生が実際に高校1年生の授業を行っておられる中での感触を踏まえて、次年度高校2年生で土曜講座を開講してみたいというお話であると理解し、必ずや素晴らしい有意義な講座が実現できるとの確信をもって、実施をお願いした次第であります。

さて現実には、今年度、昨年度とも、研修旅行や文化祭の準備、実力テストなどと重ならない時期を考慮し、春から夏にかけての5回と、秋から冬にかけての5回の2期に分け、計10回の講座を実施して頂きました。受講希望調査をしたところ、期待通り、生徒個々の志望分野に関係なく、こうした議論に関心のある生徒が20～30数名集まってくれました。そこから先の、授業の詳細、生徒の反応については十分把握しておりませんので、ご報告できませんが、昨年秋に私学の教育研究集会で行った公開授業の際には、今年度と昨年度の講座を受講した生徒に参加を呼びかけたところ、結果として、高校2年生と3年生が一緒になって、初めてとは思えない学年を越えた熱い議論を展開してくれ、後ろで見学していた多くの先生方を感心させると共に、彼ら自身も大いに満足した（というより

まだ議論し足りないといった）様子で終わったことが強く印象に残っています。

通常の、生徒全員を対象とした授業ではなかなか実施できない、こうした取り組みは、まさに今の時代にこそ非常に必要なものではないかと考えています。大阪大学臨床哲学研究室の皆様の、この2年間の実践に心から感謝すると共に、できることならば次年度以降も是非継続していただけることを強く希望しております。

（ふじわらよしひさ）